

Russian Lesbian Mothers

ロシアのレズビアン母親

Interviewee

Dr. Alisa Zhabenko

Q. 研究者としてのバックグラウンド、関心領域など教えてください。

ロシア国民だが現在フィンランドを拠点として生活している。ヘルシンキ大学でジェンダー研究の博士号を取得した。スターリン後の時代から現代までのロシアのレズビアンの母性を研究しており、母親の世代グループに焦点を当てている。研究論文は、ロシアの立法状況の変化を反映して、レズビアンコミュニティがどのように変化したかを分析したもの。これは、10年間にわたって収集されたインタビュー、1,800人を超える参加者を対象とした2つの調査、およびサンクトペテルブルクに拠点を置く組織ComingOutと共同で行った100人の参加者の調査に基づいている。

ロシアのLGBTの人々に関する法律の変遷は、過去50年間、LGBTコミュニティ全体に影響を与えてきた。一部の活動は違法だったが、しばらくの間合法になり（つまり、国による監視がなくなり）、現在は再び違法になっている。これは、LGBTの人々の選択、彼らが社会でどのように生き抜いたか、彼らがどのように自分自身を提示するか、そして彼らがどこに支援を求めるかに影響を与えた。その結果、2013年以降、ロシアのLGBTの人々が移民を希望して列をなした。

レズビアンの母親が、ロシアの反同性愛者という敵対的な背景に対して、生殖と日常生活をどのように戦略的に組織化するかを研究によって明らかにしたいと考えてい

る。立法の枠組みの影響を考慮せずに、ロシアのレズビアンの母性について書くことはできない。LGBTが国からあまり監視されていなかった時期、ロシアのLGBTコミュニティは、望むような生活を送ることができていた。

Q. レズビアンの母親に対してインタビューをするにあたって、ラポールは築けましたか？

約10年前にこの研究を始めた。当時、ComingOutという組織にボランティアとして参加していた。この組織のおかげで、多くのLGBTの人々にアクセスできるようになり、パイロットインタビューのために研究対象を募集することができた。クィアコミュニティの積極的なメンバーでもあり、クィアイベントを企画していた。これによってさらに人々を募集することが可能になり、その後、雪だるま式になった。最終的に、スターリン時代の法律の影響を感じていて、まだ恐れている70代の女性を含む、さまざまな女性にインタビューすることができた。

最初に調査を開始したのは、ロシア政府がLGBTの人々に対して積極的に「警告」しなかった自由な時期だった。その結果、LGBTの組織は、多くのイベントを公然と組織し、開催することができた。しかし、反同性愛者の法律が再導入されたとき、自分は、LGBTコミュニティで公的なプロフィールを晒していたため、ロシアを離れなければならないと感じた。この後の数年間は、恐怖を強く感じており、研究対象者を募集することが困難だった。ロシア政府の焦点は主に活動家に向けられていたため、普通の人々は再び、徐々にオープンになり始めた。2013年、別のインタビューを実施し、人々が自分の経験について話し、話を聞く機会を切望していることにすぐに気づいた。それは関係者全員にとってセラピーだった。最後のインタビューは2016-17年に行った。

Q. 対象者のリクルートで苦労した点。工夫した点は？ゲイの父親に比べてレズビアン之母親にインタビューしにくいのはなぜでしょうか？

女性は社会であまり目立たず、脆弱なグループであり、より閉鎖的だ。これは、米国のような西側諸国にも当てはまる。レズビアンカップルの子育てはプライベートで行われ、あまり注目されていない。彼女らはそれを「特別な」と見なしていないため、共有しようとする考えが少ないのでは。これは、彼女たちが女性であり、社会が女性を母親と見なしているせい。研究対象者からよく尋ねられた。「ここで何を研究しようとしているの？自分たちは特別ではなく、異性愛者のカップルと何も変わりはないのに」。対照的に、ゲイの男性は、社会で父親として受け入れられていないため、父親になる権利を求めて戦っているように感じる。その結果、彼らは問題を政治的なものにし、彼らの戦いを分かち合うことを目指している。強いフェミニストの視点を持っているレズビアンの女性は、政治的な面を認識しているので、積極的に共有してくれる可能性がある。

Q. インタビュー対象者のうち、家族を作った方法について大体の内訳を教えてください。レズビアンカップルにとって、それぞれどんな課題や困難があるのでしょうか？


彼女らが家族を作る方法は、年齢と生まれた場所に依存していた。ロシアで生殖補助医療は、1996年から98年頃に始まった。それ以前は、人工授精にアクセスすることはできなかった。その結果、1960年代後半または1970年代に生まれ、生殖補助医療が導入される前に育った女性は、前に夫を持っていたり、子供を産む目的で男性と性交したりすることがよくあった。

二つのシナリオに出会った。一つは、母親になるために夫を持った女性と、レズビアンではあるものの、夫を愛していた女性。自分は、このコホートを最後のソビエト世代と呼んでいる。

生殖補助医療がロシアに導入されたとき、レズビアンの女性はより実験的になった。現在「計画されたレズビアン家族」と呼ばれるものを始めた人もいる。彼女らは、主にドナー精子の人工授精によって、レズビアンカップルとして一緒に子供を育てることを選択した。多くの人が友人（クリニックの関与はない）の精子を使おうとしたが、これはポピュラーな妊娠方法だった。一部の人は、男性から子供の生活に関与しないという合意をとって、男性と性交した。

何人かの女性は養子縁組を選んだが、彼女らは最年少のコホートであり、自分はその新しい世代と呼んでいる（現在は30代半ばから40代前半）。この新しい世代は前の世代よりも多くの可能性と選択肢があり、カミングアウトがより重要であると考えられ、公然と議論されていた時期に社会人になった。彼女らはインターネットにアクセスでき、他の国のLGBTの人々が何をしているかを知ることができた。その結果、彼女らは養子縁組だけでなく、IVFとドナー精子による人工授精（代理出産ではない）にも積極的だった。ゲイカップルとの混合家族を作ることを選んだ人もいた。

体外受精とドナー精子の人工授精は、クリニックが主導する。クリニックでは、体外受精の治療を開始する前に、女性に2~3回の人工授精を行う。体外受精は費用がかかるから。多くの女性は、体外受精には健康上のリスクがあるため、代わりに養子縁組または自宅で妊娠することを選択する。レズビアンの場合、女性は一般的に若くて健康だが、クリニックでは健康上の問題があるかのように扱われる。より少ない回数で妊娠を成功させるクリニックは評判が良く、患者により多くのお金を請求できるた



め、クリニックは結果にフォーカスしている。

Q. 体外受精を用いた人は、reciprocal IVF(一方の卵子を使用してもう一人の女性が出産する)の方法を用いましたか? この方法は人気がありますか? 「二人の」子供という考えは、レズビアンカップルにとって、重要ですか?

研究中に相互 IVF の例を見なかった。ロシアの家族政策は保守的であり、国家によってイデオロギー的に主導されている。自分がインタビューしたほとんどの女性は、自分の生物学的な子供が欲しいという強い願望を表明した。これは、養子縁組があまり人気のない選択肢であることを意味する。また、パートナーも自分の生物学的な子供を望んでいるため、ほとんどの人がパートナーに卵子をあげたくはないだろう。離婚の場合、共同母の権利が認められず、実の母親が子供との面会を許可しない可能性がある。彼女らは、それぞれが生物学的な子供を持つことによって、この状況で「平等」になりたいと思っている。一方の女性だけが生物学的母親であるレズビアン家族の事例を観察した。しかし、これらの女性は新しい世代の出身であり、多くの場合、共同母の育児権を確保する法的措置を講じている。たとえば、共同母に権利/責任を与えるための正式な合意を作成する。これらには、どちらかが死亡した場合、相続の権利が書かれていることもある。

Q. インタビュー対象者で印象的だった事例は?

インタビューでは、またとない話をたくさん聞いた。ある生物学的母親は、子供が生まれたにもかかわらず「子供には拘束されない」と主張した。彼女は、母親になるということがどういうことか知りたいと思っ


ていたが、子供から自由であることを選んだ。

モスクワ出身の1組のカップルは、インタビューの時点で15年以上一緒にいて、計画されたレズビアン家族だったが、自分たちの関係を子供たちには完全に秘密にしていた(子供たちは母親らをただの友達関係だと思っていた)。彼女たちはそれぞれ別の精子ドナーを使用して妊娠して、同じアパートの建物の同じ階にある別の部屋を購入した。これは、モスクワのアパートがどれほど高価かを考えると、面白いシナリオだ。カップルは毎日お互いを訪問し、それぞれの娘の名付け親だ。どちらもドナーと複雑な取り決めをしていて、一人はゲイで、もう一人は異性愛者。彼女らへのインタビューによれば、娘たちは彼女たちが親密な関係にあることを知らない。それは非常に複雑な取り決めだった。

一番新しい論文(今年後半に出版予定)は、レズビアン家族の祖母と、彼女らがレズビアン娘との関係をどのように管理しているかについて考察した。人々が物事に対処するための手段を持っていないとき、彼らは非常に創造的になり、状況を管理し、関係を主張するためにさまざまな方法を使用する。ロシアの事例はこの分析にとって有益だと思う。

Q. ロシアの LGBT に関する法律をめぐる状況について簡単に教えてください。

LGBT の人々にとって現在のロシアの状況は芳しくない。議員たちは現在、反同性愛者の法律をさらに厳しい方向に変更することを検討している。2013年には、LGBT に対するポジティブな見方を未成年者にシェアしないようにするための変更が導入された。これにより、レズビアン母親は特に脆弱な立場に置かれる。現在、この法律を拡大して、ポジティブな LGBT メッセージの共有を一切禁止することを検討している。これにより、LGBT の人々について誰



にも教えることができず、LGBTの画像を広告に使用することはできず、LGBTを支持する見解を公的にシェアすることはできなくなる。すべての研究者は脆弱な立場に置かれ、ロシア語で自分の研究を公開できないことがデフォルトになる。LGBTをテーマにしたすべてのロシア関連の研究資料（会議記録、ロシア語の記事、ロシア語のWebサイト、オンライン資料など）がインターネットから消去されていることを確認している。これらの出来事や研究論文があたかも存在しなかったように感じられ、とても悲しい。これらの資料をオンラインで検索しても、検索結果は示されない。これと同じ状況がポーランドでも起こっていて、自分の同僚は資料を隠すしかない状況だ。同僚たちの仕事を保存するためのアーカイブができるのを期待している。自分は、LGBT活動家としてのアイデンティティのためロシアに滞在するのが危険だと感じたため、2012年にロシアを離れた。同時に、博士号を取得したロシアの大学は、政治情勢のために自分の仕事をサポートできなくなったとアドバイスしてくれた。その後、フィンランドに移り、ヘルシンキ大学で研究を続け、フィンランドのパートナーと一緒に暮らした。現在、ロシアにいる家族の安全のため、将来の出版物では自分の名前を変更することを検討している。

Q. ロシアのレズビアン家族について、それぞれの世代ごとの特徴について簡単に教えてください。どのような脆弱性がありますか。

三世代のレズビアンの母親を観察した。


1) 最後のソビエト世代。これらの女性は、スターリンの死後、ソビエト連邦の崩壊前のソビエト末期に生きた。多くの人は自分の性的指向について知らず、異性愛者として結婚生活を送っていたが、それと並行して生涯を通じて女性とも関係を持っていた。この世代の多くは1991年以降に子供た

ちにカミングアウトをして、それまでとはまったく異なる生活を送り始めた。あるインタビュー対象者は、閉鎖的な社会で30年も「失われた」ことを望んでいなかったと語った。彼らは孤独であり、まるで刑務所にいるかのように感じていると話した。こうした制約にもかかわらず、彼らは非常に創造的で、他のレズビアンとコミュニケーションをとるためにたくさんの秘密の会合を持っていた。

2) 境界の世代。これらの女性たちは、1991年に反LGBT法がリベラル化された後に成長した。彼女らは、ロシア国外への旅行やインターネットを通じて情報を入手する自由な時期を経験し、国の圧力を受けていなかった。彼女たちは家族形成に関して利用可能なより多くの選択肢を持っていた。この時代には、LGBTクラブ、新聞、ジャーナル、プロジェクト、サミットなどがあった。1990年代は、ロシアのLGBTコミュニティの「黄金時代」と呼ばれている。コミュニティはまだ覆い隠されていて、政府からは見えていなかった。アイデンティティを隠す必要はなかった。

3) 新しい世代。このコホートは、オープンとカミングアウトに焦点を当てた人権の言説のもとで成長した。彼女らは、クィアであり、同性婚を含めた平等な社会を作ることについて西欧社会と同じ考えを持っている。このコホートは、反同性愛者法の再導入とロシア社会の閉鎖性への回帰の課題に直面している。その結果、多くのコホートが海外に移住した。

ロシア社会がまだかなり開かれていた2005-6年に、自分はレズビアン界で交流を始めた。レズビアン専用の劇場、クラブ、カフェなど、興味深いアクティビティがたくさんあった。小さな町から、レズビアンの首都であり、多くのクィアと出会える場所であるサンクトペテルブルクに引っ越した。この時代には、警察の保護を受けたプライド行進さえあった。



2013年に立法の背景が変わり、反同性愛者法が再導入された。この後、多くの活動家がアメリカとヨーロッパに移住し、ロシアでは活動家運動が縮小した。多くの活動家もこの時期に母親になり、子供たちの安全上の懸念から、可視化されることを望んでいなかった。とても保守的になった。

研究者として、社会が急速に変化するさまを追跡するのは興味がある。しかし、自分はロシアから逃れたこともあり、不安定だと感じている。

Q. ロシアのレズビアンカップルは精子ドナーをどのように探していますか。子供へのテリングは行われていますか？ サポートグループはありますか？

社会からの制約があるにもかかわらず、今もレズビアンたちはロシアで家族を作っている。政治危機は子供を持つという彼女らの決定に影響を与えたようには見えない。自分は、生物学的衝動とイデオロギーがどのように政治的懸案材料を克服できるかを推測する。しかし、周りが危機的状況であるにもかかわらず、レズビアンが家族を始めた方法にはいつも驚かされる。たとえば、たくさんのレズビアンが COVID の間に母親になった。

自分がインタビューしたほとんどのレズビアン母親は、子供に事実を知らせている。彼女たちが通常一緒に住んでいることを考えると、関係を隠すことは困難だろう。何歳に伝えるのが子供にとって最も適切かについて不安があり、一般的に家族以外の人には話さないように子供に伝えていた。共同母について、家の外で疑惑が生じないような呼び方を選んでいった。たとえば、姉妹、いとこ、叔母、名付け母親、乳母など。子供の学校や病院などでこのタイトルを使用していた。10代の子供に問題が生じる場合もあった。例えば、友人を家に招待できないとか両親のせいではじめにあうなど。しかし、全体として、彼らは状況をコントロールし、順調だった。女性たち

は自分たちの物語を成功の物語として提示した。


Q. 精子ドナーはどのような存在ですか？

このトピックに関する論文を書きたいと考えている。自分がインタビューしたレズビアン母親は、ドナーを表すための方法をいくつも持っていた。ドナーを「私が子供を産むのを手伝ってくれた善良な人」と表現する人もいた。以前のパートナーなどを「失踪した友人」と呼ぶ人もいた。子供がまだ幼く、この問題をまだ解決していない人もいる。

男性の友人との間に、子供を持っていた女性にインタビューした。友人は子育てに参加しないことに同意していた。ドナーには妻と子供がいて、全員が彼女を助けることに同意した。子供たちは、自分たちが半きょうだいであることや、男性が生物学的父親であることを知らずに、一緒に遊ぶことがよくあった。インタビューの時点で、子供は6歳か7歳だったが、今は17歳になっている。そのあとどのようになったかを知りたい。

Q. その他

2020年に新しい憲法がロシアに導入された。この法律は、結婚を男性と女性の結合として明確に定義している（「2人の結合」とは全く意味が異なる）。生殖に関する法律も変更され、異性愛者の夫婦に対し、妊娠するための経済的支援を提供することで、異性カップルを好ましいものとみなしている。独身女性や男性へのサポートはない。代理出産は合法だが、独身男性は小児性愛などの恐れがあるため、子供を持たないよう圧力をかけられている。独身女性は、子供を養育または出産する前に、心理学者による面接、および親のグループに参加する必要がある。医師から、同性愛者であるかどうか、なぜ独身であるかなどについて、立ち入った質問がなされる。



単に適切なパートナーに会わず、ドナー精子を使って妊娠したいと考えている異性愛者の独身女性を知っている。このような女性は脆弱であり、生殖補助医療にアクセスするのに苦労している。しかし、クリニックは利益重視であり、患者として独身女性を求めている。ビジネスに有益であるため、ゲイやレズビアンに優しいと宣伝する医師もいる。政府が状況を管理しているが、実際には、クリニックとレズビアンコミュニティの間で合意がある。ただし、前よりも縮小している。クリニックの代表者は、生殖補助医療や家族を始めるプロセスについてプレゼンを行うためにセミナーやワークショップを開催していたが、現在は無い。

10～15年前は、生殖補助医療とドナー精子を買えるのは高給取りの女性だけだった。女性は男性よりも賃金が低いので、経済的負担は大きい。しかし、今では確実に前よりも手頃な価格になっている。ドナー精子は現在 200 ユーロ未満で買える。

Q. 現在進めている研究、将来やりたい研究は？

現在、博士論文を完成させており、1990年代のレズビアンの母親に関するプロジェクトも傍で行っている。安全上のリスクを考えると、出版がどうなるかわからない。インタビューを匿名化する必要があり、情報提供者の安全を常に考える必要があると思っている。LGBT コミュニティは小さく、危険にさらされている。完了すると、ハッキングされる可能性があるため、自分のコンピューターからすべてのデータを消去する予定だ。

今後、ロシアのクィアのテンポラリティについての論文を書き、1990年代の研究を続けていきたい。

(2022年6月)

Dr. Alisa Zhabenko [Link](#)

ヘルシンキ大学でジェンダー研究の博士号を取得。ロシア出身で、ロシアのレズビアン母親について研究している。2012年にロシアからフィンランドに移住し、研究を続けている。

Sorainen, A. M., Harding, R., Zhabenko, A. & Mizielinska, J., 2022 Queer/ing Surveys in the Legal Field: A Roundtable. *Social & Legal Studies*.

Zhabenko, A. 2019 Reproductive Choices of Lesbian-Headed Families in Russia: From The Last-Soviet Period to Contemporary Times. *Journal of Lesbian Studies* 23(3):321-335.

Zhabenko, A. 2019 Russian lesbian mothers: between traditional values and human rights. *Journal of Lesbian Studies* 23(3):321-335.

Sorainen A., Zhabenko A. 2017 Strategies of non-normative families, parenting and reproduction and neo-traditional Russia. *Families Relationships and Societies* 2(2):171-211